



映像身体の誕生－19世紀末～20世紀初頭における映像実践と身体の関係

松谷，容作

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

2010-09-25

(Date of Publication)

2011-10-26

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5312

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005312>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	松谷 容作
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学 位 記 番 号	博い第 5312 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 22 年 9 月 25 日

【 学位論文題目 】

映像身体の誕生－19 世紀末～20 世紀初頭における映像実践と身体の関係

審 査 委 員

主 査	教 授	長野 順子
	教 授	嘉指 信雄
	准教授	前川 修
		早稲田大学文学学術院教授 長谷 正人

論文内容の要旨

論文題目

映像身体の誕生

——19 世紀末～20 世紀初頭における映像実践と身体の関係

氏名：松谷 容作

神戸大学大学院文化学研究科（博士課程）社会文化専攻

指導教員氏名 （主） 前川 修 准教授

（副） 長野順子 教授

（副） 嘉指信雄 教授

「映像身体の誕生——19 世紀末～20 世紀初頭における映像実践と身体の関係」 論文要旨

平成 22 年 9 月 24 日提出

神戸大学文化学研究科（博士課程）社会文化専攻

学籍番号：047D713H 松谷 容作

小論の目的は、初期映画、つまり映画誕生から1906年または1907年頃までの映画と様々な映像実践のイメージに関わる諸身体を描出することである。現代の私たちの映画および映像経験と同様に、世紀転換期の人びとも多様なイメージに対し、様々な様相を孕んだ身体を用意し、構築し、分解し、変容させた。その四つの身体とは「イメージを受容する身体」、「イメージを産出する身体」、「イメージ化した身体」、「更新、変容した身体」である。周知の通り、それらの身体は、19世紀末から20世紀初頭のコンテクストの中に佇み、近代の様々な力学に取り囲まれている。従って、私たちは、初期映画における身体を描出するために、単に美学的・感性的な観点だけでなく、文化、社会、経済、医学、技術など多様でハイブリッドな観点を準備し、分析し、考察する必要がある。

本論におけるこうした研究方法や態度は、1980年代辺りから隆盛する初期映画研究の流れの中に位置付けられる。

1980 年代以降、映画および映像について語る論者たちの視線が、それらを取り巻く諸変化の中で、映画、映像におけるイメージやテキストなどの分析からそれらを受容する生の観客、またそれらと観客の関係性の分析へとシフトチェンジするに伴い、従来の映画理論の不十分さが浮かび上がってきた。そして、映画および映像に対する 1960 年代または 70 年代に構築された映画映像諸理論、つまりグランド・セオリーに基づく理論の脆弱さが、声高に叫ばれることになる。こうした動向は、少なくとも、二つの動機付けに基づいている。その第一のものは、グランド・セオリーに依拠した理論が、1980 年代以降に変化を被る現実の映画および映像経験にうまく対応できない、という点である。第二のものは、グランド・セオリーに依拠した理論において、歴史性、社会との関係性が欠落している点である。

以上のような 1980 年代以降のグランド・セオリーに依拠した映画および映像理論への批判において初期映画研究は、批判運動の旗手的役割を担うかたちで登場することになる。

トム・ガニングらを代表の論者とする初期映画研究が何よりも着目したことは、従来のグランド・セオリーに基づいた映画研究および映画理論が描出する映画史の見直し、修正である。従来、映画史は、ジャン・ミトリの歴史研究にあるように、理論先行型の歴史記述であり、さらに物語映画に向かった進歩史的、目的論的なパースペクティブをもった

歴史描出であった。そうした問題を乗り越えるために、映画システム内の諸要素間の関係の変化と連続性を、その背景としてのコンテキストに添うかたちで描出すること、言い換えるならばグランド・セオリーに依拠することなく、イメージや資料から立ち上がる諸コンテキストに基づいた映画システムの局地的、歴史的記述、そのことが必要なのである。

そのような映画の歴史的記述の試みにとって、初期映画は、格好の実践の場となった。というのも、一方で、これまでほとんど手付かずか、価値を与えられなかった初期映画に固有の価値を見出すことで、この試みの有効性が十分に裏付けられるからである。こうして、初期映画を未熟な物語映画、または物語映画への一段階とみなしてきた、従来の目的論的映画史は、改編を迫られることになる。また同時に、この試みは、物語叙述や様々なイデオロギーの体制に侵されていない、初期映画の制作モードを同時代の社会との関わり、また他分野の歴史との関わりから明らかにすることで、従来のグランド・セオリーに基づいた映画理論とは異なる理論的パースペクティブを、つまり歴史性と社会性を回復したパースペクティブを提示することができるのである。

そして、こうした試みを実現する初期映画を語る概念装置として、「アトラクションの映画」という用語が作り出されたのであった。この概念は、一方で、物語映画とは異なる断片的で、個別的で、散逸的な初期映画のイメージと観客の関係を表象する。他方でそれは、物語映画の幻想に拘束されていく近代の主体ではなく、物語的体制から脱する主体を、つまり1980年代以降の新たな映画と観客との関係を分析する可能性を与えたのである。

確かに、初期映画研究は、グランド・セオリーに基づいた従来の映画研究の諸々の問題点を乗り越える——歴史性、社会性の回復、現代の映像経験を論じる可能性の提示——試みを行った。しかしながら、そうした議論には、少なくとも二つの問題が孕んでいるように思える。第一の問題とは、「アトラクションの映画」という概念に対する反省の欠如であり、第二は、身体性への配慮の欠落である。

「アトラクションの映画」という概念に対する反省の欠如とは、例えば、チャールズ・マッサーが指摘するように、現在の初期映画研究において初期映画がアトラクションの側面だけで語られている、という側面である。また同様に、初期映画の時期は、実写映画がドミナントであるにもかかわらず、アトラクションの側面がより強調されるフィクション映画についての分析が、初期映画研究の中心的課題となっている、という側面である。つまり、初期映画研究において、「アトラクションの映画」という概念の有効性の側面ばかりが共用され、その論理的、実証的脆弱さが十分に反省されていないのである。

次に第二の問題は、初期映画研究において映画の上映空間などを問題化しテキスト解釈を越えた映画経験の研究が進んでいるのだが、「アトラクションの映画」を用いた議論の多くがイメージと身体の関係に注意を払うものの、身体そのものの変容や更新などについては殆ど無関心を装っている点にある。換言すれば、そういった議論において、世紀転換期の映像実践が当時の人びとに生じさせた諸々の身体性については、「アトラクションの映画」を図式化し、観客はショックを受け、視覚的快楽を享受するという、画一的な議論

に陥り、依然として十分な議論がなされていないのである。つまり、初期映画研究は、従来の研究と同様に、未だ観客の多様性を論じ切れていないのである。

そうした背景の下、本論は、テキスト解釈を越えた、初期映画における映像と身体の多様な関係を明らかにするのである。詳しく言えば、本論は、19世紀末から20世紀初頭における映像実践を通じて、その受容者の身体が、自動的に、自発的に、強制的に変容し、更新する諸様相を彼らの行動、行為、身振りまたイメージから描出することを試みるのである。

論文審査の結果の要旨

氏 名	松谷容作
論 文 題 目	映像身体の誕生——19世紀末～20世紀初頭における映像実践と身体の関係
要 旨	
本博士論文は、初期映画およびこれと同時に時代の映像実践におけるイメージと身体の関係を描き出した研究である。つまり、世紀転換期のヨーロッパ、とくにフランスにおいて、映像を見る／制作する／映される身体がいかに社会文化的力学の収斂点となり、また同時に、この身体が、映画・映像を通じていかに多様な層へと分解され、再構築されていたのかが討究される。そのために参照される言説が、映画映像をめぐる言説（シネオラマという視覚装置についての言説）、人類学と生理学の言説（マレー・アルニョーの映像実践）、精神医学（シャルコーとマリネスクの方法論）、外科学における言説（ドイエンの医療実践）であり、それぞれの言説における身体イメージの変容が詳細に跡づけられる。こうした一連の言説の検討を経て、初期映画および映像実践が共有していた身体イメージの力学、散逸するとともに統一化へも向かうある種の揺動という共通した特性が読みだされる。本論文は、しばしば単層的に議論されがちな初期映画の身体多様性を抉りだした論文である。 序では、従来の初期映画研究の意義、その問題点が明らかにされる。初期映画研究の有効なツールとされている「アトラクションの映画」（トム・ガニング）という概念はたしかに映画研究において画期的意義をもちえたが、その転用や応用過程において内実を反省されることなく、結果として、制度的な物語映画との対立関係をかえって硬直化させてしまう。また、これに並んで、映像に関わる身体諸相についても、深く精査されることがないままにとどまっている。このイメージ経験と身体多様性を捉えなおすために、各章で焦点を合わせられるのが、イメージを受容する身体、イメージを制作する身体、イメージ化される身体、イメージ受容により変容する身体という四種類の領域になる。 第一章では、「シネオラマ」という気球から撮影した映像を全方位スクリーンに投影した視覚装置とその受容者たちの身体をめぐる諸言説が分析対象になり、初期映画が前提にしていた映像と身体が明らかにされる。シネオラマと初期映画が共有していた性質とは、非線状性と非中心性（ノエル・バーチ）であり、事物の質や肌理を露わにする不安定さに満ちた「ぼやけたイメージ」であった。シネオラマはこの不安定さを高めた映像装置である。しかし同時にそこでは、音の併用によって、イメージを統一化する力学（映像と音との関係）とふたたび流動化させる力（音の発生源と音との関係）も作用していた。シネオラマ（と初期映画）を受容する身体は、映画発明期の編成途上の流動のなかに投げ込まれ、再組織化されつつあった身体だったことが明らかにされる。 第二章では、初期映画に頻繁に見られた「色の揺動」とその原因になった「制作する身体」が考察対象になる。従来、この色の揺動めぐって、再現性の観点から見た技術的な不完全さ、アトラクションとしての色の可能性というふたつの観点から議論はなされてきた。たしかに後者の、19世紀後半における色自体の質、その刺激的、感覚的価値を強調した議論は、社会文化的コンテクストから色の力を明らかにした。しかし、映画の製作に介在し、揺動の契機となっている女性工員たちの身体については十分に考察がなされていない。もちろんそれは、手彩色用の機械になじまない身体すれの痕跡だというだけではない。身体と機械が次々と接合されることによって生成する機械状身体の連続的な流れとその切断の力学こそが、色の揺動という形で機械＝身体が被っていた変容なのである——それは、映写技師の身体をはじめとして初期映画の上映に関わる諸身体にも当てはまることである。	
主 査 記 載 氏 名 ・ 印	長 野 順 子

また、彩色工場での労働に関与した女性の身体は、当時の文化的区分のみならず、ジェンダーをめぐる医学的区分、労働の言説における区分をほみだしていく複雑な身体を顕著に示している。以上のように、従来等閑視されがちであった「制作者の身体」の複雑な様相がここから取りだされる。

第三章では、「イメージ化された」自身の身体が受容者たちによっていかに見られていたのかが分析対象になる。たとえば、初期映画の観客たちは「ご当地映画」において自身のイメージに「隣観」するとともに、その強度の刺激ゆえにある種の症状や疾患も引き起こされていたという。こうした、イメージ化される身体と症状を帯びた身体、その映像による症状の治癒との関係を明らかにすべく、医学（ヒステリー研究と外科学）とその映像「的」実践に焦点が合わせられる。リサ・カートライトが述べるように、こうした科学映像と初期映画の視覚モードには緊密な関係が存在するからである。ヒステリー研究においては、第一にリシェによる写真をもとにしたデッサンが「映画的」方法によって、症状をもつ身体の運動を復元しようとしていた。また第二に、シャルコーがその公開実験で執着した催眠療法という症状の再生／操作技術は、当時の初期映画におけるイメージの再生技術と並行した軌道を描いていると言うこともできる。さらに、シャルコーの弟子グオルグ・マリネスクはヒステリー患者治療のために実際に映画装置を利用していった。映画は、初期の映像に特有な「判断不可能性」の揺らぎを患者が受け容れ、反省することによってある種の治療機能を果たしていたのである。また、初期映像実践と医者たちの関係も同様である。彼らも、身体イメージの統一化／散逸化する力学のなかに投げ込まれ、さらには当時の大衆の科学、教育、娯楽の複数のコンテクストの間で引き裂かれ、ある種の変容を被らざるをえなかったのである。

第四章では、他者の身体を見る身体に焦点が合わせられる。写真においてすでに看取される統制不可能な身体、「生の他者」身体イメージは、初期映画に引き継がれ、さらに独特な変容を被る。そのひとつの例として1895年のパリ民族学博覧会で制作された最初期の人類学映像（ルニョー）が資料とされる。それは、アフリカの住民の歩行を映像で記録し、その運動を低速で再生することによって身体の無意識的細部を判断可能にしようとする試み、さらに映像化に加え、記号化、数値化を駆使した反復強迫的試みであった。同時にこの映像実践は、当時の陸軍の身体教育、いわば身体イメージの細部を見ることによる身体の更新をも意図していた。こうした身体更新は、初期映画の映像群にも共通した特性がある。それは、同じ映像形式による反復、撮影者との間主観的相互作用、それを通じての身体運動の多様な差異の自らの身体への取りこみ（あるいは取り込みの失敗）という性質である。取り込みの成功／失敗する身体は順応的身体と抵抗的身体と名付けられ、両者の背景にある模倣的傾向という共通性が指摘される。初期映画映像において他者の身体を見る身体は動揺がこのようにして取り出されるのである。

本論文は、以上のように、従来の初期映画研究が等閑視していた身体多様な諸相を焦点にし、しばしば個別分野に限定されて議論されがちな諸映像実践を渉猟し、その諸分野の間にある繋がりを果敢に明らかにしようとした点で、高く評価されるべき研究である。また、その映像身体論の統一的な視座は、初期映画研究にとつてばかりでなく、映画研究全体におけるもたらす寄与は大きいと言えることができる。

本審査委員会は、以上の点から、全員一致で、論文提出者松谷容作が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	長 野 順 子	副 査	教授	嘉 指 信 雄
副 査	准教授	前 川 修	副 査	教授	長 谷 正 人